

## 自閉症カフェ

日時：2009年7月31日（金）15:00～17:30

場所：木の花幼稚園

参加者：大学側 11名+俵（記録係） 幼稚園側 10名

注：黄色のマーカーは医学に携わる方々の発言，緑のマーカーはそれ以外の分野の研究者の発言，マーカーをつけていない部分は，幼稚園の役員の方々の発言です。\*の部分は俵が付け加えました。

1 自閉症は遺伝か（この質問に対する回答は省略）（\*1～4は自閉症に関する医学的知識について）

遺伝要素は強い。

2 自閉症とわかるのは何才ぐらいか。胎児の時にわかるのか。そして，それがわかった時にオキシトシンを投与すれば，そのあとで良好な友人関係を形成することが可能なのか。

診断は早ければ早いほどよい。胎児に関しては産婦人科とタイアップ。

出産後の赤ちゃんから採血するのはむずかしい。1つの解決法として，臍帯血での診断。

オキシトシンの投与に関しては，たとえば1才の子供にオキシトシンを投与してもよいかどうかという問題がある。

子供にオキシトシンを使用するかどうかは，脳死と同様，国民を2分する可能性。よって，慎重に。

臍帯血もいきなりとはいかない。

3 オキシトシンの投与方法

鼻にスプレー。

4 自閉症は個性ととらえている。治療によって人格が変わってしまうのではないか。

調べないといけない。ただ，本人は変わらない。変わるのは，本人をとりまく人間関係（ex 会話ができるようになった）

5 本人に確認をとって治療を始めるわけではないが，それは本人にとってどうだろうか。

難しい。よって，現在は20才以上を対象。検査をするだけなら子供（本人）に影響はないだろう。

検査をすると、「あなたのお子さんは自閉症の脳に似ている」と言われる可能性がある。

6 遺伝子を調べれば自閉症の診断はできるのか。自閉症についても羊水検査でわかるのか。1人目が自閉症の場合、2人目を産む時、問題にならないか。

何をもって自閉症と診断できるかが決まっていない。

ここ10～20年で出生前に診断できるようになるのか。

40～50%の確率で自閉症に影響を与えている遺伝子がみつまっている。

第1子が自閉症の場合、第1子が健常者の場合と比べて、25倍の確率で第2子が自閉症になる。第1子が自閉症の親は第2子の出産について悩むのでは。

そうだろう。遺伝子をみつける技術は進んでいる。社会生活とからめると、どの程度それが重要かどうかはわからないが。

出産前に自閉症とわかることについては倫理上許されると思うが、大事なのは、今、自閉症といわれている人たちをどのようにしていくかということ。

出産前に自閉症に影響を及ぼす遺伝子をもっているとわかったら、産むのを断念する人もいるのではないか。

自閉症に影響を及ぼす遺伝子はまだはっきりとわからないから調べようがない。よって診断は無理。

自閉症だけではなく、ありとあらゆる病気を出産前にチェックしてほしいということになる。

小さい子については改善することができるかもしれない。だから早期発見しようという話。

7 突然、自閉症と診断されたら、周りも本人も変わるのではないか。生活しにくくなるのではないか。知らなかったら普通に生活できるのに（\*社会的認知について）。

生きづらいと感じていた人にとって、自閉症と診断されることでホッとする場合も。

自閉症がまだ社会で認知されていないころ（1980年代）だと、親が子供を人前に出さなかったり、隠したりしていた。認知されることによって生じる弊害もあるが、救われることのほうが多いのではないか。

検診で自閉症とわかるのは大切なこと。

以前と病気の数は変わらないが、精神科に来る患者が増加した。精神科に来ることができるようになった。精神科にくることのメリットが大きくなった。

うつ病の場合、20年前には診断書に「うつ病」とは書かなかったが、社会的認知が広がっ

たことによって現在は「うつ病」と書く。

どのような病気もどんどんオープンになっている。もっと生物学的にも明らかにする必要はある。「得体の知れない病気」では問題。近年はネットもある。

8 (7と関連) 本人と親の話がほとんどだが、その周りの人々について、あまり取り上げられていない。自閉症とはまったく無縁な人たちとの関わり合いが問題。障害を持つ子供を持つ親のネットワークはあるが、そうではない人たちは関わり合いがない。

自閉症について知らない人がいる。自閉症とはまったく無縁に生活してきた人たちとの関わりが問題。重度や軽度があるということも知らない人もいる。社会的認知が低い。社会全体の問題。社会的認知を高めていくことを期待。

重度の自閉症の人は働くことは可能か。

まじめで、継続力があるので、組織の中で単純労働者として働くことができる。

軽度の人の方が継続力がない。他の人にもわかってもらえない。

雇う側からすると自閉症を理解しているということ。

周りから見てもわからないという軽度の人もある。その人たちは周りの人たちからの理解が得にくい(例:態度が悪いで片付けられる)。軽度の人の方が辛い。

客観的にアスペルガーとわかるものをみつきたい。今は、経験のある者だけが面接をしてわかる。

脳の測定(脳磁計)についての説明(省略)

9 (脳磁計の話を受けて)治療として取り入れた場合、どのあたりの改善を目指しているのか。

むずかしい。

アメリカで大問題。2,3才で自閉症のリスクがわかった子に対して、1日8時間、1年もしくは2年かけてつきっきりで治療。就学時点で普通になった。アメリカでは、問題がみつかったら税金を投入して改善する。日本にも、この考え方が入ってきている。

10 自閉症の人たちの得意な分野を発見することは可能か。

今は難しいが、可能性はある。

自閉症のひとたちは能力を持っている。だから何とかしたいという気持ち強い。

昔は協調性がなくても、(何か得意なことを持っていたら)生きていけた。たとえば大工さ

ん。

11 自閉症の子供を持つ親はこのような研究が進んでいることを知っているのか。自閉症の子供をもつ親に対して、どこまで教えてあげればよいのか。

(＊この質問をきっかけに「知る」ということについて議論されている)

ネットで出ているから知っているだろうが、バランスよく情報が届いているかどうかはわからない。

確実な治療手段もなく、軽度の人に関しては健常者の行動とほとんど変わらないということだが、そのような現状で自閉症ということを知ってよいのか。メカニズムがわかっていて、処置法が明らかな場合は知るとよいだろう。しかし、そうではない場合、知ってしまったらどうするのか。あえて知らないという選択肢もありではないか。今現在、個人的状況として、知ってよいのか（最終的には知ったほうがよいとは思うが）。

社会においては、必ず自閉症と診断された人を抱きとってあげるという覚悟が必要。

知る必要のないことも世の中にはある。ただ、自閉症のように、社会に適応できない人が出てきたらどうにかしてあげたい。

若い親御さんの意識も変わってきているかもしれない。20年前はあれやこれやと心配しないで育てていたが、現在は異なる（第1子、第2子の違いという意見もあった）。

心配だったらどこに相談すればよいのか。

市民がアクセスできる情報が必要。でも、それも知らないほうがよいのか？

知るといことは、知ったあとで、どのような態度を決定するかも含めなければならない。何のために知りたいのか。

「以前にわかっていたら・・・」という親もいる。ダウン症と同じように、知りたければ知ることができるように、選択できるようにすればよいのでは。

今の親たちは、調べるか、調べないかという選択を迫られている。

何を調べたら、何がわかるかわからないかを提供することも大事。

終了